

天才と女神

中野正順

ハックスレイは、一九二二年以来今日まで、長編小説を九つ書いている。昨年出した「天才と女神」*The Genius and the Goddess* は一三〇頁足らずの中編もので、中編ものでも一つ、一九二六年に出した「グレイスの三態」*Two or Three Graces* と云つた二〇〇頁足らずのものがある。「グレイスの三態」は、初期の三長編「クローム・イエロウ」*Chrome Yellow* (1921)、「道化踊」*Annie Hay* (1924)、「文反古」*Those Barren Leaves* (1925) と時代的にも内容的にも大体同じ型に属し、それはグレイスという無性格の一女性の転落記をものしたものであつて、三〇年後の今日に出た中編小説「天才と女神」とは大へん趣を異にしている。何れにしても、長編中編を問わず、それ等の中でハックスレイが取扱う重要な人物はみなインテリで、何れも倫理、心理、歴史、科学、神秘主義などに関して饒舌をあやつり、エマソンの「学者」が「考える人間」であるならば、ハックスレイの人物は実に「喋る人間」であることを思わせる。そして作者はこういつた人物を、明敏な観察と冷静な批判を以て完膚なきまでに剔抉し解剖し去るのが、ハックスレイの小説の特性でもあり面白さでもある。例えば前述の彼の初期の四小説では、何れも金持、画家、文士、詩人、小説家、その他の知識人に有閑マダムを配して、世界第一大戦後の混乱した世相を写し、彼等をして各人各様の人生観、社会観、恋愛観を述べさせると同時に、作者はそれ等の人物のうちに矛盾を発見し、これを諷刺的に描写している。

その頃のハックスレイは、人間が各自の可能性を發揮しようとしているひたむきな姿と、それ等から構成されている複雑な社会と人生を肯定しているようである。こういつた各自の可能性にひたむきな人間と人間とを「対位」的に組合わせて構成された一大交響樂が、一九二八年に出た「対位法」Point Counter Point である。だが、一見その可能性を肯定されているように見える諸人物は、その実、作者の鋭利な解剖刀によつてその矛盾を諷刺的に剔抉されている。このハックスレイの諷刺こそ、彼の小説家としての本性であり、二〇年代、三〇年代の彼の小説を一世に風靡せしめたものである。一体、諷刺家といつたものは、何れも何等かの道義的憤激とか、人間的反抗の上に立つものである。然らばハックスレイは、何物に對する憤激や反抗に立つていたのだろうか？ 初期の四編に於ては、それは明瞭ではない。矛盾した人物が雜然と諷刺的に描写されている丈けであるが、これは「対位法」になると、ラムピオンと云つた特別な人物が出現する。その外の諸人物が、お互に「対位」的に配列されて、おのがじしその可能法にひたむきな姿を描き出されているが、それ等の人物に對して綜合的に理想化されているのがラムピオンである。ひたむきな諸人物は、換言すれば、各自の偏つた才能によつて自己の魂の足場を失つた哀れな人間の姿である。これに對してハックスレイは、人間の可能性の全部を完全に發揮する理想的人物としてラムピオンを想定する。諸人物の矛盾を手がかりとして理想的人物に到達したのである。このハックスレイの理想的人物とは、これは彼の友人D・H・ローレンスを模したと云われるが、文明に毒された自我から脱して、自然の自我に返つた姿である。だから、ハックスレイのものを諷刺の根底となつている憤激とか反抗といつたものは、右のような人間性の自然とか全体といつたものが、毒された個人の自我とか、そういつたものから生れた社会の制度によつて受ける圧迫と損傷に對するレジスタンスと云つて差支えない。就中人間の知性は、自我が人間性を毒することに与つて力のある尤なるものである。こういつた自我と人間性、知性と精神との問題、換言すれば、偏狭な自我という牢獄におちている人間性の矛盾を診斷し、どうすれ

は広い大きな人間の自然的自我に帰ることが出来るかは、ハックスレイがその後書いた全ての小説の中心課題だったのである。そして一九三二年に出された「美事な新世界」*Brave New World* は、人間の知恵である機械文明の盲目の発達が人間の喪失をもたらした架空的未来の悲劇を描いていて、そこには未だ自我の弊害から脱する道を知らない絶望の気分が支配しているが、一九三六年に出た「ガザに言いて」*Eyewitness in Gaza* になると、主人公アントニーは人間愛と平和主義のうちに真の自由を認めている。そしてその翌年に出た、小説ではないが、「目的と手段」*Ends and Means* に於ては、自我からの真の自由は、仏陀や、キリストや、老子や、その外凡ゆる時代凡ゆる国に、見られる神秘主義の教へのうちに見出されるといつて、自己の凡ての欲望を放棄する、所謂「無執着」の徳を以て人間救済の道と考えるようになったのである。即ちハックスレイは、ラムピオンのように自分のうちにある可能性を全て実現することは出来ないという。なぜかなら、この世界は多くの矛盾に充たされた実に悲劇の場所である。第一、「対位法」に於て総合的と云つた意味の非知性的人物を想定した作者ハックスレイ自身が、知性そのものの持つている快味を棄て去ることの出来ない性格から、到底あいつた非知性的境地に到達出来ない矛盾に陥つていたのである。こういった現実世界に於て人間は、よろしく凡ての欲望を捨てて愛、同情、寛容の念を抱く所謂聖者の道をたどるべきだといつた風に、ハックスレイは前記二作によつて一種の思想的転向を示したのであつた。時も折、彼は一九三八年に、年来の眼病治療のためカリフォルニア州南部に移住し、そこで受けたベイツ博士の療法（詳しくはエッセイ「見る術」*The Art of Seeing* (1942) に述べられている）の方法が奇縁にも、上記の彼の確信を益々強めたのである。だからハックスレイは、一九三八年以後に出した二つの小説「幾夏すぎて」*After Many a Summer Dies the Swan* (1939) 「時は止らねばならぬ」*Time Must Have a Stop* (1942) の中で、そう云つた神秘主義こそ人間救済の道であることを益々強く主張したのである。例えば「幾夏すぎて」の中で彼は、存在には動物的、人間的、永遠的の三種類ある。このうち人

間的存在は、想像力と言語と時間の觀念に支配されて諸々の害悪を生じる。だからといつて、人間は今更動物的存在にまで成り下がる訳になれないので、唯一の救済法は時間と欲望から超越することであり、仏陀の道こそ正当な道であるといつている。そして戦後の長編小説としては、一九四八年に出た「猿と本質」*Ape and Essence* である。いうまでもなく、世界で始めて原子爆弾の落ちたのは、この小説の出る前の一九四五年である。そしてこの小説は、原子力の応用によつて今後の社会がどういつた影響をうけるかの人類の未来記であつて、「見事な新世界」が機械文明によつて人間的価値を喪失した世界とすれば、「猿と本質」は機械文明が原子力によつて自殺行為を實行して、人間が宛で野獣の状態におちた世界を描写している。だからこの長編小説は、謂わば、架空物語「美事な新世界」の続篇といつたものである。

以上簡単ながら、今日までのハックスレイの書いた長編小説のうちに流れている彼の思想の特色を見て来たが、今度出た彼の中編小説「天才と女神」は、然らばこう云つた彼の思想の流れのうち那辺の位置にある作品だろうか？即ち彼の小説のモチーフともいへべき、人間の自我による束縛状態の診断と、その束縛状態からの脱却方法の探求といつた二つの観点からいつてこの小説はどんな特色を持つてゐるだろうか？ 本稿の最初に述べたように、同じ中編小説といつても、それは情欲の波に翻弄される人間の姿を描いた三〇年前の「グレイスの三態」と大いに趣を異にしていることはその間の長い年月に彼が幾多の思想遍歴の山河を越え來つた今日に出されたものである以上、当然のことなのである。何分にも一三〇頁足らずのものであり、老年期のものであるためか、往年の長編もののような構成の絢爛さと筆致の霸氣に欠けている所はあるが、人間の矛盾曝露とその知的分析の筆致は、依然として当時の彼を偲ばさせるものがある。だが何分にも彼は老年期に在る。だから、その筆致も往時程の力強さもなく、またこの作に於て

は、思想的に今までのような聖者の道を唱道していない。人間の生きて行く道に関して、長い一生の経験を味つて来た老人の分別のように、頗る常識的な、實際的忠告を披瀝している。それがどう云つたものであるかは、この小説の物語と密接な関係があるので、いきおい、簡単ながら次にその筋を覗いて見る必要があるだろう。

まずこの小説は、ハックスレイが全て舞台をアメリカにおいて書いた初めての小説である。標題の「天才と女神」に於ける天才とは、年齢が五十六歳のヘンリー・マーチンスという当代アメリカ随一の原子物理学者であつて、女神とはケイティという三十六歳の彼の夫人をいう。重要な人物としては、この二人の外にもう一人、二十八歳になるジョン・リバースという男がいる。物語の筋はこの男から始まる。

リバースはルーテル教会の牧師の息子で、十二歳の時父と死に別かれる。その後は敬虔な母一人の手で、厳格な宗教的躰けのもとに成人する。こういった一人息子の母親にあり勝ちな、彼女の唯一の楽しみはリバースで、彼が大学を卒業して講師、助教授を経て教授になるといつた秀才コースを辿り、四十歳頃になつて、誰かルーテル教同信の娘と結婚することが彼女の理想であつた。所が時は一九二〇年、リバースがPh・Dの学位を取つてから数週間して、彼の恩師の推薦で、当時セント・ルイス大学で原子物理学講座担当のヘンリー教授の助手となり、住居の関係からヘンリー家に住み込むことになつたのである。これはリバースにとつては、窮屈な母からの、非人間的な家庭からの解放であつた。それに較べるとヘンリー家における彼の生活は、実に幸福そのものであつた。そこにおける毎日の万事が――ヘンリーを自動車で研究室へ送つて行つたり、ケイティのために野菜の買出しに行つたり、それから十歳になる末つ子のジンミイを学校へ送つて行つたり、十四歳の姉娘のルースと蝶採集に出かけたり、さてはケイティに対してダンテのピアトリスに対するようなロマンチックな愛を寄せるようになるなど、みな彼にとつては詩のような幸福な

生活であつた。そのうえ専門の上では、当代一流の物理学者の下で行う理論物理の研究生活も、彼にとつては最上の雰囲気であり当時（一九二二）の原子物理学研究も今日のような「兇悪」な段階にまで達して居らず、従つてその研究も今時のような当局の掣肘と監視をうけることなく、実に理想的な学究生活だつたのである。

所が彼の仕えるヘンリー夫妻は、互に異状な対称的性格をもつ人物であつた。先ず主人のヘンリーは、ノーベル物理学賞を貰つた所の現代アメリカ随一の原子物理学者で、プランクとかアインシュタインとかいつた多くの有名な学者を知人に持つ程知力においては万人にすぐれた人間、所謂天才的人物であつた。こういつた知能に人並すぐれた人間にあり勝な——この辺りからハックスレイの皮肉の筆がさえて来る——知識から来る何事にも先入主となつた概念や伝統的思想に支配されて、實際的物事の価値判断が出来ない。専門のうえでは天才でありながら、右のような意味で実生活ではウスノロであり、而かも性生活では一種の変態で、自分の妻なしでは万事生きて行けない人物である。そしてケイティはそういつた彼の要求を満足させるに充分な頗る性的な美しい中年の婦人であつた。だからこの二人は一種の共棲的シビエオタク、レイション関係に在つて、しかも与えるものは大部分女の方であり、男は我むしやらにそれを取り込む貪欲な幼児のようであつた。殊にヘンリーは持病の喘息に始終悩まされ、ケイティの看病なしには生きて行かれない。こういつた意味で、ヘンリーはケイティにとつて実に女神であつた。だがこの女神は、キリスト教の神ではない。そういうつた道徳神ではない、先きに彼女は性的といつたが、彼女自身ではそれを意識しない所の性的なのであつた。自分の行動には善悪を意識しない。夫ヘンリーのような知性の過剰から生れる悩みと弊害は彼女には見られない。だから彼女の神は、オリンパスにおける自然の神の姿である。ここに云う自然とは動物的、直観的超人間の境地であり、そういうつた意味の本能の姿である。つまりヘンリーとケイティは、一口にいつて一方は知性インテリゲンツと、他方は本能インスティンクトとが演じる相互関係にある存在であつた。こういつた二つの対称相互的性格の解剖的、諷刺的描写は、この小説の興味ある

部分の一つである。

こういう二人物に配するに、学生時代はフットボールの選手であつた躰のガッチリした、秀才でもある若い男前のリベースである。無事で治まる筈はない。事の発端は一九二二年の春先にケイティは、シカゴに住む自分の母が腎臓病を病んだため、その介抱に十日余り家を留守にしたのである。勿論、共棲的存在の相手がいなくなると、ヘンリーの心は穏やかでない。性に関する彼の知識が先入主となつて、妻が若い主治医と道ならぬことをやつて仲々帰らないとか、はては母の病氣は嘘だろうとかいつた色々な妄想に苦しめられる。その結果持病の喘息を再発し、それが肺炎にこじれて危険状態に陥入る。ケイティの看病なき彼は死に直面するより外はない。女中にいわせると、二年前にも一度こんな危険状態が起つて、その時はケイティの看病によつてラザラスの奇蹟が起つたという。そこでケイティは、早速呼びよせられて帰つて来る。所が不思議なことに、彼女の看病で三日経つても、四日経つても今度は奇蹟が起らないのである。何故だろうか？ それは、シカゴから久し振りに帰つて来たケイティの容貌は、母の看病によつて痛くやつれを見せていた。かねて思いを寄せていたリベースにはそれが却つて彼女を美しく見せたのだが、そのやつれが問題なのである。数日に互るはげしい看病による肉体的、精神的疲労は、彼女から女神としての徳、即ち本能的神通力を奪いとつて了つたらしい。だから今度は彼女がいくら看病しても、ヘンリーは快方に向かわず、ラザラスの奇蹟が起らないのである。所が一九二二年四月二十三日のことであつた。四月二十三日と云えばシェイクスピアの誕生日である。だがリベースにとつてはそれは肉体の誕生日ではなくつて、精神の誕生日となつたのである。というのはその日は学会から帰つたのが夜の十一時、疲労のため自分の部屋に引下つて寝たのである。それから二時間後のことである。フト暗闇のうちに女の気はいい感じて眼を覚ますと、そこに母の死の知らせを受けて悲嘆の涙にくれた夫人の姿を発見する。忽ちリベースは、哀憐と愛情の念におそわれる。間髪を入れずリベースの衾の中に飛び込んで来

たものは、彼の首に巻きつく冷え切つた二本の裸の腕と、彼の軀に強く押しつける涙に震えた女の軀であつた。それから少時あつてリベースの側に安らかに眠つているケイティは、母の死の悲しみを癒され、自然の生命を取り戻した女神の姿であつた。それはキリスト教の神でもなければ、仏教の仏でもなくて、オリンパスのペイガンの神であつた。豈囃らんや、一夜明くればケイティは以前の活気と色ッポサをとり戻し、ヘンリーはそのために段々と病勢が好転して行くのであつた。だが反対に、リベースの心は穏やかではない。一時の迷いで犯した罪に対する良心の苛責のために、或る時はヘンリー家を出ようかとも決心し、或る時はケイティにその苦しさを告白するのだつた。所がこのオリンパスの神は、それに対し深い生命のような沈黙を以て答える。そのとき寝がえりを打つて差向ける裸の背の魅力に接しては、リベースは一再ならず、折角の固い決心も崩れ去るのであつた。このように、少年時代を熱心なキリスト教信仰の雰囲気につつまれたリベースが、良心の苛責に苦しみながらも、意識せざる性的女性、善悪を超越したペイガン女神、或は深い沈黙の魔女といつたものに、良心の苛責に絶えず苦しみながらも引きづられて行くあたりの分析と描写はこの小説の圧巻であらう。

次にリベースのこういつた窮境に益々拍車をかけたものは、彼と妹娘のルースとの関係であつた。この娘は早くからポーヤ、スインバーンや、オスカー・ワイルドのものを讀んで詩作を好み、その上おませで始め十七歳になるフトボール選手に恋したが、それに振られると今度は、二十八歳になるリベースに思いを寄せて来たのである。この兆しは母親ケイティのシカゴ行きの数週間前から既に現われて来ていたが、母親が発した翌朝早速口紅を赤々と、香水の匂いを強烈に漂わしたりして、ルースの姿態が俄然色めいて来たのである。終いにはある夜ルースの方から胸のうちを告白し、突然リベースの首に腕をまわして、頬から口のあたりにキスをするのであつた。こういつたルースだつたから、母親とリベースの仲を感ずかぬ筈はない。自分の愛する男がとられた屈辱と忿懣は彼女と母親を犬猿の

間柄にしたのだつた。時も折、段々と快方に向つていたヘンリーは、医者から転地療養をすすめられる。その転地先の田舎の別荘はクリスマス以来閉めてあつたので、前以て掃除のためケイティとリベースがそこに同行することになる。そして掃除も済んで、その後の疲れやすめに取つた午睡のひと時は、またこの二人を道ならぬ陶酔の境に導く機会となつたのであつた。このことあるをかねて察したルースは、その朝学校への出掛けに、自作の詩をリベースの手に渡しておいたのである。これを今二人が披いて見れば、それは各連四行から成るベラッド風の叙事詩で、そこに描かれていたものは不貞の妻とその恋人が、最後の審判で神に裁かれている場面であつた。これを読むケイティは額に深いしわを寄せ、その唇は固く引きしめられて、さすがに内心の動揺と苦悶とはかくしおうせない有様であつた。

結局、この女神も傷つく人間だつたのである。こういつたケイティと、リベースと、ルースとの三人には何等かの宿命フリスチネイションが来ない筈はない。それから四日後の日曜日に、愈々ヘンリーは別荘に向つて出発する。一台目の自動車

にはケイティと二人の子供が乗り、二台目にはヘンリーとリベースと女中とが荷物を一所にのせて出発する。所がリベース等の車は、ヘンリーの忘れ物をとり一旦引返したため、少しおかれて目的地から二哩ばかりの所に在る交叉路にやつて来て見ると、図らずもケイティ等の車が溝に真倒様に転覆しており、それに一台のトラックがその冷却器レイヂキヤを突込んでおつたのである。そしてこれ等二台の車の間に、トラックの運転手らしい若い男がしゃがんでおり、その側に弟のジンミーが泣き叫びながら突つ立っている。十五呎離れた所に二人の女が血だらけになつて投げ出されている。ケイティは二・三分後に息絶え、ルースも救急車で病院へ運ばれる途中死んでしまうのである。弟ジンミーの語る所によると、ケイティはルースと隣り合わせに坐つて自分で運転し、その間二人は何かジンミーには訳のわからぬことを言い争つていたという。だからその時車が出し過ぎていた速力のことにも気付かず、見透しのきかぬ交叉路の所で警笛を鳴らすことを忘れていた所、突然横から来た大型トラックに突き飛ばされたのだつた。これは嫉妬に狂つた

女と、人間に転落した女神とに起つた宿命——殊にケイティは眼球が飛び出し、鼻と唇と顎とは殆んどその跡を見せないといつた、またと見られない死に様だつたのである。

以上がこの小説の大体の筋であるが、これはその事件の重要な登場人物の一人であつた当時二十八歳のリバースが、あれから三十二年経過して六十歳の老人になつた今日、彼が語る^{モノクロ}の形で述べられている。不慮の惨劇に愛人を失つたリバースは、深い傷心を癒やすために、一九二四年頃地中海東岸レバノン共和国の首都ベイルートの大学で物理学を教えていた。凶らずも近くの廃都バールベクに滞在中の或る考古学者の娘ヘレンと結婚し、帰米後はバークリのカリフォルニア大学に奉職して今日に至つてゐる。その間三人の娘を設けたが、妻ヘレンには早く死に別れ、今は孫相手の淋しいやもめ暮しである。所が一九五四年のクリスマス・イーヴに、レバノン時代の知人であり、当時亡妻ヘレンの父の弟子であつてレバノン滞在中ヘレンに結婚を申込んで拒絶されたことのある、今は職を変えて小説家となつてゐる男が突然訪ねて来る。リバースの書斎で二人は赤々と燃えるストーヴを囲んで話すうち、偶々そこにあつた彼の恩師の伝記（ヘンリーはその時から十年前八十七歳の高齢で亡くなつてゐる）「ヘンリー・マーチンスの生涯」といつた書物のことから、リバースはその小説家を相手に、ウイスキーを傾け、煙草をふかしながら、時計が十二時を打つまでポツリポツリと語つたのが以上の物語りである。そしてこの小説では聴き手の小説家は第一人称であらわされ、語り手のリバースは六十歳の今日、自分が二十八歳の時に起つたことを独白の形で話すのである。そういつたこの小説の手法が興味のあるところで、この場合第一人称の聴き手は単に合槌を打つ話相手でなく、語り出されるリバースの話を要所所で質問を投げかけたり、コメントを飛ばしたりして、リバースの話を先へ先へと展開、発展させる役をつとめてゐる。そしてリバースは三十二年前のヘンリーや、ケイティのことを物語ると同時に、当時の自分のみならず

現在の自分の性格をそこに展開していくのである。そういった展開の手法は、ブラウニングの劇的独白を思い出させるが只違っている点は、これは詩でなく散文であること、聴き手の姿がこの場合われわれの眼前に在ることである。

だが語り手と聴き手との間に交わされる言葉とその反応によつて、語り手の性格が展開して来るといつたこの小説の手法は、劇的独白の形式に大へん似ていてまことに興味が深い。だからリベースの性格は、ヘンリーやケイティのそれと異つてこの小説全体に於て流動的に、發展的にあらわれている。即ち彼が始めルーテル信仰と母親の偏愛の虜から解き放たれて知的、詩的雰囲気の高るヘンリー家の人となつたのは、彼にとつて一種の恩寵であつたのである。やがて彼はその世界に於ける偏つた知性と本能との交錯する姿に接しているうちに、いつの間にかその本能の魅力に負けて、自己は感能の酔に捉われた姿と、良心の苛責に苦しむ姿との二つに分裂して呻吟する。それも二人の女の惨死といつた宿命は、彼にとつては亦別の恩寵となつたのである。何となればその時彼は生き残つたために、妻ヘレンと結婚し彼女から起死回生の哲学を学ぶことが出来たからである。人間は、瞬間そのままを生きていくためには、凡ゆる他の瞬間に死ななければならぬ。死によつて始めて完全な生が生られる。これこそ直接経験のうちに見出し得る神の知恵であり、長い人生を経て来たリベースの体得した人生観である。こういった現在のリベースの眼から當時を眺めると、彼とケイティとは何れも片手落ちの人間であつた。当時のリベースは人間の概念と社会の因襲とに捉われた人間であり、ケイティは善悪を超越した無意識と深い生命の沈黙、即ちローレンス式の「暗黒」とか、「或る物」といつたものの体現者のようであるが、それは只自然本能の動物に過ぎないオリムパス神であつて、そこには生命の**トランスフィギュレーション** トランスフィギュレーション 変貌 貌 とか発展の動きがない。尚更ヘンリーの内には、こういった神の知恵を散見することが出来ない。外見は知力に富んだ花々しい天才であるが、その実感情的だたつ子で、何等実際に処する能のない、即ち知性過剰による精神虚弱者なのである。だから彼は惨事から運よく逃れてその後八十七歳の長寿を保ち、学者としての名声はいやが

うえにも上り世の伝記者は彼を評して「不滅の知力の焰」といつたが、然しそういつたヘンリーの姿は、リベースにとつては、只徒らに見振り手振り面白く、自己の知識を誇らしげに物語るゼンマイ仕掛けの猿にしかうつらなかつたのである。そしてこのように、リベースの口から語られた彼自身や、ヘンリーや、ケイティに関する観察や意見は、またハックスレイ自身の現代アメリカの姿に投げかけられた諷刺の言葉であるとも考えられるのである。初めにいつたように、「対位法」におけるような現代人の欠完の曝露と諷刺の花々しい構成もなく、「ガザに言いて」以後の作のような、聖者道精進の哲学もないが、知性と精神との問題に関するハックスレイの関心は相変らず見られ、それをアメリカの舞台にのぼして、問題の解決に対してはアメリカの雰囲気になさわしく、頗る現実的な方向を示唆しているものといえよう。それは、二十八歳のリベースならぬ「グレイスの三態」をかけた頃のハックスレイが、長い人生を経験して六十歳のリベースならぬ老境に到つた今日のハックスレイの感慨をあらわしたものと考えられないだろうか。そしてその感慨たるや、リベースの所謂「宿命」とか「恩寵」とか、凡ゆる瞬間の死といつた経験哲学のうちを感じさせられる何か人力を越えたメカニズムは、シーリヤのような殉教的性格の人物は本小説中には見られないが、人間は毎日死を経験して行くとか、あらゆる瞬間が人間の新しい出発点であるといつたエリオットの「カクテル・パーティー」の持つメカニズムにも一脈通じる感慨なのである。そして「カクテル・パーティー」は「よいどれの罪の意識」と或る人が評したが、では「天才と女神」はさしづめ「まおとこの罪の意識」というべきだろうか、呵々!! (一九五六・一・三〇)

本稿執筆に参照したハックスレイの小説とエッセイ

Crome Yellow (1921, Chanto)

Annie Hay (1923, Chanto)

天才と女神

- Those Barren Leaves (1925, Chatto)
Two or Three Graces: Four Stories (1926, Chatto)
Point Counter Point (1928, Chatto)
Brave New World (1932, Chatto)
Eyeless in Gazer (1936, Chatto)
*Ends and Means (1937, Chatto)
After Many a Summer (1939, Chatto)
*The Art of Seeing (1942, Chatto)
Time Must Have a Stop (1942, Chatto)
Ape and Essence (1947, Chatto)
The Genius and the Goddess (1955, Chatto)